

ジャンプするけん、これがええん

子どもの遊びは、手際や手順が合理的でなかったり、必要な技術が身についてなかったりして、大人の目には、助言や援助が必要と見える場面があります。子どもに寄り添い見守るのか、援助や環境の工夫をするのか、判断が難しい場面でもあります。この事例は、保育者が援助する際に、子どもに声をかけて反応を読み取った上で、考えていた援助を修正しています。子どもが夢中になって繰り返す遊びや言動には、その子どもにとっての理由があり、使っている物や言動から、その必要感を読み取ることができます。子どもが必要感をもち、自ら判断して遊びに取り入れていることに焦点を当て、子どもの理解を深め、保育の工夫を図ることが、「科学する心」が育まれる体験を支えることにつながります。

丸亀市立あやうたこども園

4 歳児

コース遊びの始まり

3歳児の時から、車や電車で遊ぶことが好きだった子どもたちは、4歳児になってからも、ブロックで車を作り遊んでいた。材料置き場から、ストロー・ペットボトルの蓋・カップなど、思い思いに廃材を選び、自分のイメージする車を作っている。



場面1.「カーブするんで、すごいやろ」

<6月>

Aさんは、自分で材料を選び、思うままに自動車を作れることが嬉しそうだった。選んだ材料で、大きさや形の違ういろいろな車を作ることを楽しんでいた。

自動車ができた子どもたちは、自分の車を走らせるが、真っすぐ走る車は少ない。Bさんの車は、作ったコースのゴール手前で曲がってしまった。しかし、**Bさんは、「何もしなくても車が曲がる」という現象に驚いたものの、「僕のカーブするんで、すごいやろ」と、すぐにその動きに興味をもち、喜びへと気持ちを変えていた。**



〔保育者の読み取り〕 子どもたちは、自分のイメージする自動車を作るために、材料を選んでいる。この場面での子どもたちは、自動車の外観（形、大きさ、付けたい付属品など）のイメージが実現するように考えたり、見つけた素材の魅力を活かすように使ったりして、製作を楽しんでいる。そして、作った車で遊ぶという必要感から、子どもたちがコースを作って走らせたことで、自動車の外観からは気づけなかった、「動きの特徴」に気づけた。このことから、“自動車の動き”にも関心が向き、そこに面白さを感じている。

場面2.「ジャンプするけん、これがええん」

<6月>

車を走らせるコースが長くなり、箱積み木だけではなく、段ボールを台に乗せて起伏のある道になってきた。できた坂道にCさんがテープ類を転がして遊び始める。**芯だけのものやセロハンテープ、ガムテープ、ビニールテープ…と転がして、どこまで転がっていくかを繰り返して遊んでいる。**Aさんは、**それぞれの芯の大きさや重さの違いで、転がるスピードや距離が違うことを感じ、予想するような様子を見せながら転がしたり、動きを見たりしている。**

遊んでいるうちに、段ボールの坂道に“たるみ”ができた。「すぐに、たるむね」と、保育者が声をかけ、段ボールを直そうとすると、Cさんが、**「ジャンプするけん、これがええん」と言い、段ボールの下の方の位置を動かし、調節している。**台の位置を変えて芯を転がすと、“たるみ”ができた所で一旦沈み、反動で跳ね上がって転がるスピードが増した。**台の位置により、段ボールの“たるみ”が変わり、予想外の面白い動きで転がっていくのを楽しんでいる。**



〔保育者の読み取り〕 AさんとCさんは、自動車を走らせたことで、テープ類などの物が転がることや、動きの速さと距離に興味をもった。子どもたちは自分の興味を追求する遊びを実現するために、必要な材料を選んでいる。この場面では、「転がる」という特徴に注目して芯という素材を見つけ、いろいろな芯を使って動きの違いを楽しんでいる。Aさんは、同じ場で遊ぶ友達の転がす物や動きをよく観察し、芯による動きの違いに興味を深め、予想したり確かめたりして楽しんでいる。子どもたちは、何度も繰り返して転がる動きを楽しむことで、芯の違いにより動きが変わるだけではなく、段ボールの表面の状態によっても、いろいろな転がり方や動きになることに気づいている。この新たな気づきにより、転がり方や速さ、距離の違いだけではなく、転がり方の面白さを追求する遊びになった。Cさんは、段ボールの“たるみ”を直そうとする保育者の関わりにより、芯をジャンプさせるには、この“たるみ”が必要だと意識し、「これがいい」と、自分の思いをはっきりと伝えることができた。保育者は、Cさんの考えを受け止めて援助を修正したことにより、幼児理解を深めることになった。

場面3.「坂道だって登れるんで」

<6月>

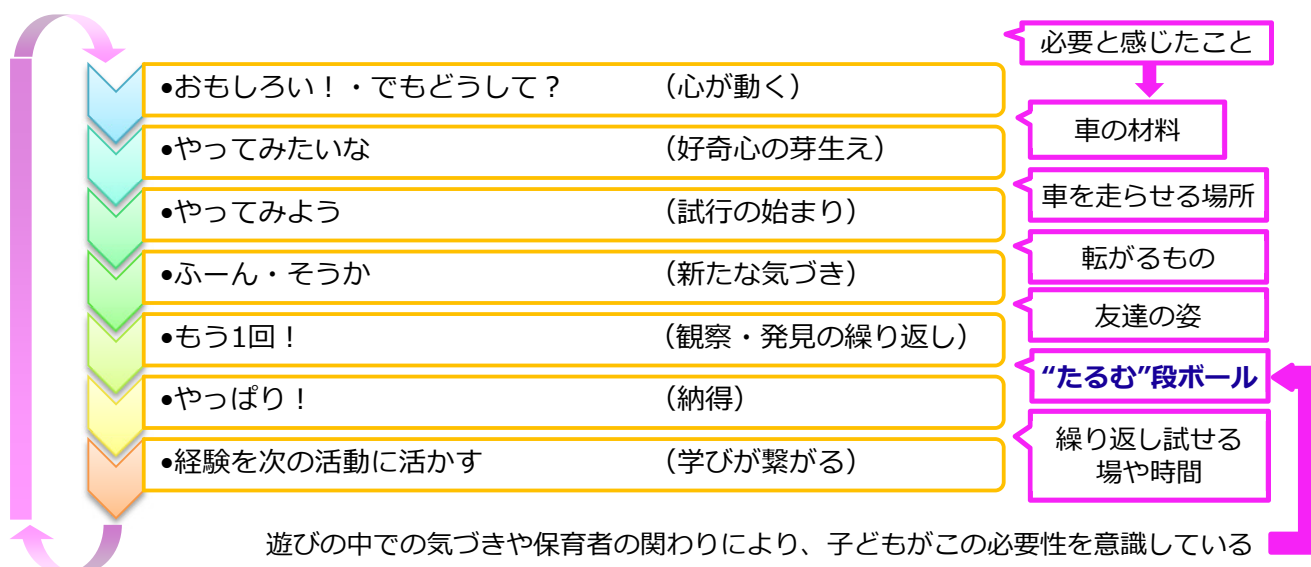
Cさんは、“たるみ”のできる段ボールの坂道にテープを転がし、ジャンプさせて遊んでいる。**Cさんは、下りで勢いがついた芯が、坂道を登ることに気づくと、驚きの表情で、「うわっ、登った」と言った。**そして、すぐにもう1回やってみる。Cさんがそばで遊ぶDさんに、「坂道やって、登れるんで」と、嬉しそうに見せると、Dさんも、Cさんの教えてくれたことに興味をもち、すぐに試す。会話は無いものの、**顔がパッと輝き、下ったり、上ったり…次第に揺れ幅が小さくなり、止まっていく様子を面白がっていた。**



【保育者の読み取り】 Cさんは、芯が転がることへの好奇心が深まり、転がる遊びを繰り返し追求したことで、転がるという動きには、“転がり落ちる”と“転がりながら登る”動きがあることを発見した。

この発見により、今までの転がし遊びで気づいたこととは違う価値や面白さを感じ、これを友達に伝える言動につながっている。この姿からは、満足するまで繰り返し試すことのできる環境や時間を保障することの大切さが分かる。また、ものや事象に真剣に向き合っているCさんは、「段ボールという素材によってできた斜面の角度やその高低差のある環境が、この遊びには必要なこと」と感じて、繰り返し遊んでいる。芯の動きを繰り返しよく観察したことで感じたことを活かし、創意工夫して遊んでいるため、“転がり登る”という新たな発見の喜びを体験した。これらの姿からは、ものの特徴や予想外の動きが生まれる不思議さなどを感じて繰り返し遊んだ体験により、新たな発見につながる創造性が芽生え、「科学する心」が育まれたことが分かる。

気づきから、学びへとつながっていくまでの過程（「科学する心」につながるキーワード）



【考察】 子どもの小さな気づきから生まれる意欲こそ、「科学する心」の芽生えであり、これは、心が動いたその瞬間から始まっていると考える。そこにどんな気づきがあったのか、その気づきが子どもの心をどう揺さぶり、次の行動につながったのかを丁寧に見取ったことで、「心揺さぶる経験を積み重ねる中で、その経験が子どもたちのどのような育ちや学びにつながっていったのか」を捉えることができた。

子どもにとっては、目に映った様々な事象、小さな違いや変化など、新たな出会いの全てが不思議で面白く、心が揺れ動く瞬間である。この出会いに、無意識のうちに関わりたくなる気持ちを“好奇心の芽生え”と捉え、関わろうと思わず動き出す姿を“試行の始まり”と考える。試行の過程には、予想通りの時もあれば、予想と全く違う結果になることもある。どちらにしても、**新たな気づきとして一旦は心に留まるが、それだけでは収まらないのが子どもである。「もう1回！」と、言いながら何度も繰り返していく中で、意図的に行った工夫による相違だけでなく、友達との相違や偶然の相違に、「次は！」との発想や、試すために必要感をもった関わりが止まらない。**その「もう1回！」「次は！」と、目を輝かせて集中している姿は、まさに小さな科学者である。そして、「やっぱりそうだ」と自分なりの答えを導き出し、貴重な体験となっていく。